

天地

ネットワークテーブル 529号

天地シニアネットワーク 2022. 3. 18

TENTĪ TODAY		1
新聞記事から 「アートは心のごはん、小さな美術館 大きな思い」 「ウクライナ」と「ロシア」歴史の実相は、松里公孝・東京大学教授に聞く		2
推薦図書 『秘闘・私の「コロナ戦争」全記録』(岡田春恵著・新潮社)		5
会員の広場		7
旅行	2年ぶりに「そうだ京都に行こう」を執行(6) 京都を題材にした随筆や小説で知識を蓄える	池端千一郎 7
回顧	国立慕情(12) 小平キャンパス	津田 孚人 8
事務局		10

TENTĪ TODAY

遅咲きの梅の花が、別れを惜しむかのように咲いていますが、一方で早くも桜の便りが聞こえてきました。まん延防止も全面解除になるようですが、気分的には旅行に行くのはまだ早い、というところ。コロナ禍はまだまだ続きますので、気を緩めるわけには行きません。大相撲が始まり、来週にはプロ野球、高校野球も始まります。しばらくはテレビのスポーツ観戦で我慢しましょう。

「英会話の楽しみ」、伊那闊歩さんが体調を崩し、最後の1回が延びています。愈彭年さんの「中国人から見た日本人の言語表現心理」も終了しましたが、原本の「了解日本、了解日語(日本を知る、日本語を知る)」の中国語ヴァージョンの部分を日本語に翻訳したいというグループがあり、次回から掲載できそうです。然は然りながら、スペースが空いています。世に知らせたい、あるいは書き残しておきたいという志のある方どうぞ原稿をお寄せください。(ただし、シニアに限ります)

「円安」の恐怖が迫っています。「有事の円買い」などという言葉は、片隅に飛んでしまいました。日本は輸入偏重の経済構造ですから、物価はいずれドーンと跳ね上がりそうです。物価上昇は、年金生活者には困りものです。政府は、選挙も近いので、1回限りで、一人5千円の給付を検討しているようですが、飴玉より具体的な中長期の方針を、しっかり見せて欲しいものです。検討中、とか前向きに、とか抽象的な説明はもう結構です。

ロシアのウクライナ侵略、映像で見る避難民の人たちの顔、姿に心を痛めない人はいないでしょう。人災なので、それだけに気の毒です。日本への避難者も当然多くなるでしょう。日本人の、真価、度量が問われます。うわべだけの親切にならないようにしたいものです。

大学時代同期で、天地シニアへも寄稿者として登場した加藤幹雄さんが会長となって経営する「レストラン キエフ」(京都南座の北側にあるビルの6Fにあります)TVに「キエフ」の名が出るたびに気になります。ロシア料理と同時に本格的なウクライナ料理を提供しているので、問題ないはずですが、とかく日本人には、短気で、そそっかしい人がいるので、気になるのです。

同店は、旧満州のハルピンから帰られた父上が、東京新宿にロシア料理店「スングアリー」を開き、京都の「キエフ」は1972年にオープン、加藤さんは2004年から「キエフ」を引き継いでいます。コロナ前の関西旅行で、たびたび寄りました。旅行再開の時が来るのを心待ちにしています。なお、歌手の加藤登紀子さんは、実妹です。

3月7日の朝日新聞・朝刊・文化欄に、「ウクライナとロシア 歴史の実相は一松里公孝・東京大学教授に聞く」という記事がありました。ロシア、ウクライナの両国の歴史を残念ながら知りませんでした。が、「キエフ」の攻防戦などあるのでしょうか。

長く続いた歴史を破壊すると、後世に汚点を残し排除されます。そのような覚悟、プーチン大統領にあるのでしょうか。(後掲の、「新聞記事から」に、要約を載せてあります)

「新聞記事」から

3月1日・日本経済新聞・朝刊・文化欄

アートは心のごはん、小さな美術館 大きな思い

第一生命に勤務していた時の一年先輩、須藤一郎さんが、新聞で紹介されていました。「小さな美術館 大きな思い」というタイトルがついていましたが、自前で美術館の館長になられた経緯を知っていましたので、大変懐かしく、うれしく読みました。絵画を好み、若手のアーティストを育てる、ご夫婦の共作のようですが、周囲を慮り、真面目で実直な性格、そして、思いを一途に貫く須藤さんの意志の強さが実ったに違いありません。

記事によれば、須藤さんが初めて絵を買ったのは1982年(昭和57年)、池田20

世紀美術館(静岡県伊東市)の「菅創吉の世界」展で、ご夫婦で菅創吉の「壺中(こちゅう)」という作品が気に入り、即頼んで購入。価格は、1カ月の生活費を超えていたが跳び上がるほどうれしかったそうです。その後、菅創吉の作品を中心に50点ほどの絵画作品を集め、多くの人に見て貰いたいという気持ちになって、1990年に自宅(町田市)の一角で展示を始めた。菅創吉が早逝したため、菅創吉のコレクションが注目されるようになったと以前聞いた気がする。そして定年退職の直前に、「銀座にこないか」と誘われ、いつか銀座に移るが維持が難しく、知人から小田原の空き家をとと言われて、2007年に小田原に拠点を移した。

須藤さんは、なかなかのアイデアマン。企画展示のかたわら収集作品を地方に運んで「出前美術館」を開催、100回以上にもなるほど好評。また、日本には、若手作家を組織的に支援する制度があまりないと、自宅時代公募展を開き、応募者全員と面接して作品を制作してもらい、審査のうえ何点か買い上げ、さらに個展を開く機会を提供した。また短期海外留学制度を設け、見聞を広げてもらう試みにも挑戦した。小田原では、国内外の作家十数人を招き、滞在しながら作品を制作してもらう取り組みをスタート、地元自治体や企業からの助成も実現、また地元民との交流会もこれまでに四回実施している。

絵の「同志」だった奥様を、2020年1月に失いながらも、「アートは心のごはん」をモットーにして、86歳の今もまだまだ頑張っているご様子、頭があがりません。

3月7日、朝日新聞・朝刊・文化欄

「ウクライナ」と「ロシア」歴史の実相は、松里公孝・東京大学教授に聞く

ウクライナとロシアを隔てる国境線は、旧ソ連時代にできたもの。両国の関係を理解するには、ヨーロッパ・ロシアと呼ばれるこの地域全体を知る必要がある。歴史的起源は、9～10世紀ごろに栄えた「ルーシ」にある。

ウクライナを南北に流れるドニエブル川などの河川沿いにできた都市国家を公国と呼ぶ。キエフ中心の、その緩やかな連合体が「ルーシ」と呼ばれた。

「キエフ・ルーシ」は、コンスタンチノーブル(現イスタンブール)を中心に栄えていたビザンツ(東ローマ)帝国から、のちに東方正教となるキリスト教を受け入れた。この「ルーシ」と正教の伝統をもつ「東スラブ人」を根幹にするのが現在のロシア、ウクライナ、ベラルーシである。

しかし13世紀にモンゴル勢が侵入し、「キエフ・ルーシ」は、モンゴル支配の深さの違いから「東ルーシ」、「西ルーシ」に分れた。(モスクワなどが含まれる「東ルーシ」は、現在のロシア、「西ルーシ」は、現在のウクライナ、ベラルー

シに相当する)

モンゴルが衰退すると、リトアニア大公国が拡大する。この国は、リトアニアとベラルーシの連合国家で、東西ルーシのどちらがルーシの後継者かという本家争いがあった。

16世紀にモスクワ大公国のイワン雷帝が登場、バルト海に進出しようとしてリトアニア大公国と戦争になる。痛手を受けたリトアニアはポーランドと合同し、ポーランド＝リトアニア大公国となる。ここでカトリック化が進み、正教徒のコサックによる反乱がおきた。指導者のボグダン・フメリニツキは、1654年に同じ正教徒のモスクワと同盟を結び、ドニエプル川左岸の地域もモスクワ側に組み込まれていく。

帝政ロシア時代に入ると、エカテリーナ2世は、オスマン帝国と争い、クリミアなど南ウクライナを支配して、「ノヴォ・ロシア（新ロシア）」と呼んだ。さらに18世紀の後半のポーランド分割の際に、リトアニア、ベラルーシ、右岸ウクライナも併合していく。

帝政ロシア時代は、ナロード（人民）や、ルースキー（東スラブ人）という意識で柔軟に国を統合していた。今のロシア、ウクライナ、ベラルーシ人、ひっくるめて単一のロシア人という扱いだっただ。

ソ連時代になると、連邦構成共和国や自治共和国・自治州をつくるために中央から公式に民族を生み出す。公式民族に認定されれば、自民族出身の幹部も輩出できるし、言語は文章語となり、学校教育でも使える。文化的なアイデンティティである民族を政治的なカテゴリーにした。

ソ連共産党が民族を創出したためにウクライナが分離したのは、けしからん、というのがプーチン大統領の主張だ。

現在のロシア人が好きなのは、ウクライナやベラルーシは、同根の兄弟だという主張だ。（一方、ウクライナは、キエフ・ルーシはウクライナ国家の起源であり、その時点で、自民族の特性は成立していると、する）

民族意識に基づいて今の国境線を変えたいという主張は通らないし、戦争の理由にならない。ソ連崩壊時に、国際法上の原理に基づき、それまでの行政境界線を国境にして、15の連邦構成共和国のみ独立を承認したという経緯がある。

ただ、環黒海地域では、ウクライナ内のドンパス地方のように、分離の動きが戦争につながりやすく、数々の非承認国家を生んでいる。欧州と中東のはざままで、ロシアやトルコが影響を及ぼし合い、欧州諸国のような主権国家の建設が困難

に直面している状態だと言っている。

推薦 図書

『秘闘・私の「コロナ戦争」全記録』・岡田春恵著・新潮社 (津田孚人)

テレビのニュース・ワイドショー、各局、朝から夜まで多数ありますが、コロナ禍でもつばら見てきたのは、5ch朝8時の「羽鳥モーニングショー」だけ。レギュラー出演の玉川徹氏と最初のころからゲストながら連日のように登場していた岡田春恵白鷗大学教授、この二人のコメントに納得するところが一番強かった。孤軍奮闘していた岡田春恵教授が、昨年途中から番組に登場しなくなり、寂しく思っていたところ、昨年末に『秘闘・私の「コロナ戦争」全記録』を新潮社から出版された。あまり、話題にならず、最近知った所だが早速買い求めた。

コロナ禍はまだ続きそう。対策が欧米に比べて後手後手に回り、心配はまだ続く。最初から変わらない日本の旗振り専門家たち、その実相が赤裸々に記録され、書き出されている。一読をお勧めします。なお、参考に、とりあえず 2 か所選んで抜き書きしておきました

●2020年7月のころ(p192)

もうこうなってしまったのか・・・というのが本音だった。検査の拡充どころか医療現場で必要な検査すらできなくなりつつある。軽症段階からの隔離・保護、治療開始など、もはや出来ない状況になっていた。入院が必要な患者とされる人のほとんどは、酸素吸入が必要な患者であろう。病床が足りないため、そこまで悪化した患者しか検査できない体制に追い込まれている。だから、「療養ホテルなどの施設を急遽、増やせ」という声が上がっていた。自宅療養者数は、7月に入ってから20日間で10倍に急増していた。

分科会の見解は、「爆発的な感染拡大には至っていないが徐々に拡大している」というもので、尾身氏は「医療体制が逼迫し、普通の医療に影響する状況が少しでもあれば第2波に近づく」としたが彼の認識は現場からかけ離れているように見えた。

そうだ、尾身先生は医療現場を知らない。臨床をほとんどやったことがない、というのは厚労省では有名な話だった。ウィルスの分離もやったことがない、研究論文も著書もほとんどない。つまり、医療も現場も知らない厚労省の医系技官、官僚だった。単に運良く、日本で発生しなかったsarsやmersの対策の際に、行政の立場にいただけだ。現場で辛酸を舐めて患者を診た医師ではない。

●2021年のころ(p230)

3月になると、7日に期限を迎える1都3県の解除についての議論が連日報道された。3月3日、菅総理は早々に2週間程度の延長を決め、小池知事ら1都3県の知事らによるオンライン会議の直後、機先を制するように表明した。現実的にも解除できる状況になく、ここで感染を抑えないと英国型変異ウィルスの拡大も深刻で、医療機関の疲弊も甚だしく、すでに逼迫状況にある受け入れ病院もあった。

また、菅総理は、「集団感染防止に向け、3月末までに約3万カ所の高齢者施設で検査実施」とし、東京都でも小池知事が、「今後、介護療養型医療施設や有料老人ホーム、認知症高齢者グループホームなど約1500カ所約5万人にたいして検査を実施する」と発言した。

この頃から、尾身氏ら専門家の発言が一変してきた。まるで言質を残すかのように、対策強化へと発言の舵を切り初めた。それには前兆があった。厚労省の「アドバイザリーボード」での発言に始まっていたのだ。これより数カ月後のことだが、6月になって田村厚労大臣が私にいった。

「尾身先生が、それまで『大丈夫だ』と言ってきたのに、急に『ヤバイ、危ない』と言動を変え始めたのは1月頃(2021年)だった。分科会ではなく、厚労省のアドバイザリーボードでの発言が先だった。こっちでばかり言っていた。分科会では言わないんだ。尾身先生たちは、分科会もアドバイザリーボードも両方入っているけれど、その手の発言をするのは、アドバイザリーボードだけだった。その頃は英国型が問題だった頃だ。でも五輪についてはどうのとは言っていなかった。

新型コロナ対策では、内閣官房、加藤官房長官の下、「**新型インフルエンザ等対策有識者会議**」が内閣総理大臣に意見を申し述べることになる。その**有識者会議**の下に、「**基本的対処方針等諮問委員会**」があり、総理、または新型コロナウイルス感染症対策本部長に意見を述べる。「**新型コロナウイルス感染症対策分科会**」(通称分科会)は、**有識者会議のメンバー**から内閣総理大臣が指名する。

有識者会議は、有識者会議の長がみとめるならば、**分科会の議決**をもって**有識者会議の議決**とすることもできる。この**有識者会議**の会長が尾身氏で、会長代理が岡部氏である。**諮問委員会**も同様だ。分科会のトップも尾身氏であり、岡部氏、押谷氏などは、そのいずれにも入っている。

また**アドバイザリーボード**は、厚労省に対して助言を行うもので、厚労大臣が指名する。尾身氏らの言葉は、しばしば分科会メンバーとして報道されるが、肩書は複数持っている。これら4つの会議のどの会議で何を言ったかまでは、なかなか判別されず、記憶もされない。

アドバイザリーボードは厚労省へ、有識者会議、諮問委員会、分科会は、内閣官房へ

進言する。田村大臣が言っているのは、厚労省のアドバイザリーボードで発言しても、政策に直結する内閣官房の会議では言っていない、これはおかしいのではないか、ということだ。

会員の広場

2年ぶりに『そだ京都に行こう』を実行ーその6ー 池端千一郎 (74歳)

京都を題材にした随筆や小説で知識を蓄える

このところ万延防止策やら自身の体調不安定化でなかなか京都にいけません。そこで、京都をテーマにした随筆やら京都を舞台にした小説などを読んで知識を蓄えています。

旅行ガイドブックとは一味違う京都の一面や裏面がわかり、次回上洛の折りには是非とも行ってみたい街、寺、神社、庭園、池、川、水路、料理屋、レストラン、カフェ、ホテルなどの情報を仕入れました。

随筆で面白いのは、水上勉の「京都遍歴一巻・二巻」、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」、河野仁昭「谷崎潤一郎の京都を歩く」、鷺田清一の「京都の平熱」、司馬遼太郎の「街道をゆく『嵯峨散歩』」などです。小説なら川端康成の「古都」、谷崎潤一郎の「細雪」、森鷗外の「高瀬舟」、三島由紀夫の「金閣寺」、内田康夫の「壺霊」、芥川龍之介の「邪宗門」などが気に入りました。その他評論類では、桃崎有一郎の「平安京はいらなかった」や中村修也の「平安京の暮らしと行政」等々です。

これらの書籍の中で特に僕が気に入ったのは水上勉の京都遍歴。彼は9才から19才まで禅宗の修行僧として京都で暮らした人です。多感な少年期と青年期を京都の住民として暮らした経験や、文学者としての美しく艶やかな感性で京都の魅力を語ります。

大阪大学前総長の鷺田清一氏の「京都の平熱」は市を循環するバス206番にそった氏のお気に入りの街や店を紹介した本です。うどん屋など庶民的なお店も数多く紹介していて行ってみたい、食べてみたい、そんな気持ちになります。

この他、谷崎潤一郎や川端康成の本もさすがは文豪だけあって、街の見方という面でも、街を紹介する表現力という面でもなかなか深みがあっておもしろい。

以上簡単ですが紹介させていただきました。皆様も京都がらみで面白そうな本が見つかりましたならば、是非それを読まれて訪ねる場所に目星をつけてご上洛なさい

ませ。効果倍増を請け負います。



国立慕情(12)

津田孚人(84歳)

小平キャンパス

故人となってしまったが、元一橋大学の学長を努めた石 弘光君は、前期のクラスで一緒だった。教育大付属の出身で、彼の一年先輩の木原雄一郎さんが一橋のバスケット部にいたので、入学時から比較的親しくしていた。山男だったがバスケットがそこそこ出来たのでクラス対抗のバスケット大会では、最後のシュートをなるべく彼に託し、得点させたりした。クラブが異なったのでそれほど親しく付き合うことはなかったが、入学したときの姿を、ずっと残したまま成長していった。昭和36年3月にともに卒業し、彼は大学に残り、財政学の権威となって、政府税調の会長を長く勤め、さらに母校の学長となった。学長をおりてから、放送大学の学長に就いた。

一橋大学には、国立のほか小平にもキャンパスがある。以前は、前期2年は小平、後期2年が国立と決まっていたのだが、いつのころからか、小平キャンパスは、学生の授業では使用しなくなり国立へ集中するようになった。あるとき、小平の体育館でバスケット部の練習試合があるので、小平キャンパスに行くと、正門にかかる放送大学の看板がやたら大きく、別の大学に来たような錯覚を覚えた。正門の一橋大学の表札は小さく、字が薄れて読みにくかった。正門を入ると正面に大きな立派な建物があつたが、それは放送大学の本部(?)だった。大学の体育館は、その裏手にあり、借り物のように小さく見えた。

そのようなことがあった後に、石・放送大学学長に会う機会があった。「石君よ、小平の校舎は、放送大学に乗っ取られたみたいだね」というと、「そう見えるか」と答えるだけで、笑っているように見えた。

小平キャンパスへ行くときに乗る、西武・多摩湖線は、以前は、東京でも1・2を争うようなローカル線だった。地元では「四十二人乗り(始終二人乗り・運転手と車掌しか乗って居ない)」と揶揄されていたとのことである。

JRの「国分寺駅」からは、「西武・川越線」と「西武・多摩湖線」の二線がでていたが、津田塾生の乗る、「川越線」と一橋生が乗る「多摩湖線」は、車両の程度がだいぶ違った。「多摩湖線」は、本数が少なく、車両が古かった。車両のドアが手動式だったので、自動になれた乗客は危うく降りそこなったりした。国立と同じく、「一橋大学駅」の正面から、大学正門まで、幅広い直線道路が7～800米ほどあったが、授業に遅れそうになって学生は、駅から走った。

西武線の駅名には、一橋学園、小平学園、大泉学園、と学園が付く駅が目立つ。国立を開発した箱根土地(株)の堤康次郎は、大学を中心とした街づくりを理想としていたようだが、「赤い三角屋根誕生—国立大学町開拓の景色—(くにたち郷土。文化館発行)」に詳しく説明があるので、参考にさせていただくことにする。

堤康次郎＝箱根土地の理想は、「研学の府が黄塵万丈の商業地区にあるということとは総ての点に於いて矛盾している、都会の雑音や空気の汚濁などによる不健康、交通機関の混雑による疲労など、都会に学校があることは不合理・不経済」と問題点しめして、「学校を保健醇美なる田園に移すことは真に必要なことである」と説き、この理想の実現にあたっては、「高い土地を売って安い土地を購ひ、その剰余金で新校舎を建築し、しかも周囲を大学都市として経営する建設者があればこの決定は直ちに決定を与えられる。」としていた。それは、学校の郊外移転の必要性和、それに伴う住宅地経営に関する説明をする、という箱根土地の独創的な郊外分譲地開発の手法であった。

その一つ、大泉学園都市の開発については、大正13年(1924年)7月に、堤康次郎は、当地の村役場を訪ね、そこから村長、大地主にあい、開発計画を説明しスタートしたが、結局、予定していた大学の移転が実現せず、住宅地の開発だけで終わってしまった。箱根土地は、「東大泉駅・現大泉学園駅」を武蔵野鉄道に寄付して、11月に開業していた。後の国立駅に類似した作りの駅であった。

小平学園(国分寺大学都市)の開発は、関東大震災直後の大正12年10月から土地買収を始め、反対があつて買収面積は減ったが、約60万坪買収した。箱根土地は震災で神田駿河台の校舎が被災した明治大学に移転を勧め、大正13年8月に、小平

移転に関する本契約を締結した。箱根土地は、翌大正14年1月に、「国分寺大学都市」の地鎮祭を行い、同年3月から第一回の本格的な分譲が始めた。

しかし、移転してくるはずの明治大学が、移転問題についての賛否がでて、結局大正14年9月30日に、大学移転計画を撤回、その後、石神井にあった東京商科大学予科の移転計画が浮上した。

昭和2年(1927年)4月、箱根土地と東京商科大学との土地交換契約の締結により、大学予科を中核にした「小平学園」としての開発が始まった。予科は、昭和8年9月から授業を始め、多摩湖線の電車は、多摩湖線鉄道(株)が昭和3年1月に設立されて開業し、予科が移転したときに「商大予科駅」が出来た。宅地の分譲は、昭和14年ごろにはほぼ完売、箱根土地が目指す理想的な、ビジネスモデルとなった。

なお、「商大予科前駅」は、その後「一橋大学駅」と改称されて馴染まれ、昭和41年(1966年)7月に、一つ先の「小平学園駅」と統合されて「一橋学園駅」となり、駅舎も、両駅の間に移転された。移転後、駅周辺に商店街が形成され、あの直線道路は残されていたが、利用は少なくなっているように見えた。授業に間に合わないと、駅から走っていた学生の姿は、いまは見られないようだ。

国立の開発は、駅が後にできるので、当初は、「国分寺都市開発」と称された。国立の大学通りの桜、毎年大勢の花見客が集まるが、当初、桜は無かった。昭和9年、皇太子明仁親王(現上皇)の誕生を記念して、国立町・青年団が大学通りの緑地に植樹を始めた。

(つづく)

事務局

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス : tentisenior06@gmail.com

電話・FAX 03-3819-7651